

ルポルタージュ

自然と人がふれあい 豊かな心をはぐくむ学校

「地域・家庭・学校と連携した教育活動」

財部町立中谷小学校



これからの学校には、「生きる力」をはぐくむために、家庭、地域社会と連携した教育の取組が求められており、新教育課程では、「開かれた学校づくり」が大きな実践課題となっている。

そこで、家庭、地域社会と密接な連携を図りながら、郷土を愛し、豊かな自然に親しみ、地域の人々と触れ合う活動を通して豊かな心をはぐくむことを目標に、ユニークな教育活動を実践している財部町立中谷小学校を訪問し、取材を行った。

中谷小学校は、曾於郡財部町の北部、宮崎県都城市と隣接する県境の地にある全校児童21名、教職員9名、複式3学級の小規模校である。緑に囲まれた学校の前には、夏には蛍の飛び交う清流溝ノ口川が流れ、基盤整備された水田が広がっている。「木の香ただよう 歌声と 読書 そして思いやりのある学校」のキャッチフレーズのとおり、平成4年に完成した木造校舎は木の温もりに満ち、そこに学ぶ児童たちは、明るく生き生きとしていた。

1 親子で共に汗を流し、豊かな心をはぐくむ活動

農業も機械化が進み、子供たちが農作業の手伝いをする機会が少なくなった。「米作り学習」は、子供たちに農作業を体験させることによって、働くことの大切さや収穫の喜びを体感させることを目的に、昭和62年から実施している。校区の方の好意で8アールの水田を借りて、田植えや稲刈り、脱穀などの学習を行い、収穫した餅米を使って餅つき大会等を実施している。今年度はさらに、田植えと稲刈りだけでなく、子供たちにできる作業はすべて体験させるよう計画を工夫して実施した。



親子で汗を流す農作業体験

5・6年生は社会科学習で籾巻きをして、自分たちで苗の一部を育てた。田植えは手植えで、田植え綱を張って子供、親、先生が横一列に並んで植えていく昔ながらの方法である。1年生も泥に足を取られながら、慣れない手つきで一株ずつ丁寧に植えている姿が印象的であった。また、環境にやさしい米作りを目指し、化学肥料を使わず堆肥と魚粉の有機肥料を使う。除草剤を使用しないので、放課後や夏休みに親子で田の草取りも行った。

3 おじいちゃん、おばあちゃんは、わたしたちの先生

中谷校区には、素晴らしい技能や特技を持つ高齢者の方が多いので、この方々の協力をもらい、さまざまな活動を実施している。



わらじ作りの体験

社会科の学習では、高齢者の方々に、昔の学校の様子や昔の遊び、戦争の頃の話等を聞いて、中谷の昔の様子を学習している。また、おじいちゃん、おばあちゃんに奴踊りの際履くわらじの作り方を教えてもらった。縄を編むのも初めての子供たちは悪戦苦闘していたが、親子で力を合わせて何とかわらじらしいもののができた。運動会では高齢者の方々と玉入れ競争をしたり、校区の敬老会では子供たちが歌や作文の発表をしたりして、高齢者との積極的なふれあい活動を行っている。

4 郷土の文化財は、わたしたちが守る

毎年4月、溝ノ口洞穴で行われる岩穴祭りの時に奉納される奴踊りは、戦国時代、戦に勝った祝いに踊られたという大変珍しい踊りである。年々踊り手が減少してきたため、昭和54年に、財部町から民俗文化財保存会の指定を受け、貴重な文化財を継承している。子供たちは、一生懸命練習に励み、本番に臨んでいる。



伝統芸能の体験

5 取材を終えて

中谷小学校は、恵まれた自然や地域の人材等を活用しながら、小規模校のハンディを長所に転換し、子供と子供、子供と親、子供と教師、学校と地域が真に一体となった活動を展開していた。これらの活動の実践の積み重ねが、「開かれた学校づくり」の原点になると思った。これらの諸活動の成果は、町のふれあい祭りで行われた少年の主張で、6年生が、「ふるさとのきれいな川を守り続けていきたい」と発表したことにも表れている。また、自然や人材の活用だけでなく、アルゼンチンの日本語学校の生徒たちとの文通による国際交流なども実践している。今後は、インターネットなどを積極的に活用して、子供たちの活動を情報発信し、これらの諸活動を通して環境教育、国際理解教育など先進的な「総合的な学習の時間」の実践に発展していくことを期待したい。

取材中に廊下で出会った子供たちが、大きな声で「こんにちは」とあいさつしてくれた。その瞬間の明るく、生き生きとした笑顔がいつまでも強く印象に残っている。なお、中谷小学校の活動は、インターネットで紹介されている。ホームページアドレス <http://www.system9.co.jp/nakatani/>

(情報処理教育研究室 研究主事 池崎 和弘)